

第 102 話 スタジオ夜話

「なぜラジオドラマは衰退したのか」 II

☆ はじめに

季節はすっかり秋の様相となってきました。読者皆様にお変わりはありますか？コロナ禍も収まりつつあるようですが、その原因は不明のようです。まだ油断はできません。さて今回のスタジオ夜話は、予定のとおりサウンドドラマの今後についてのお話です。現在のオーディオコンテンツ提供環境でのサウンドドラマの可能性を探って、お話ししようと思っています。お付き合いよろしく願いいたします。

☆そもそも論 II 「前回に加えて」

すでにラジオという媒体が今日生き残ることが難しいことは前回お話ししましたが、読者皆様は承知の上のことだと想像できます。TV という電波媒体もその危機にあります。世田谷の我が家にはアンテナがありません CATV を利用しています。ネット環境も光ケーブルを利用、屋内は WiFi で PC もスマホも問題はありません。台風や地震による電気や通信インフラに支障があると広域情報インフラの電波媒体はそれなりに利用価値はあります。しかし停電してしまえばそれも利用できません。いざとなったら自家用車があります。近年、家の電気は自家用車で賄うといった発想も当たり前のことになってきました。放送局は電波を売り、コンテンツ制作販売事業は別組織でという発想がかつて話題となりましたが、世間の様相を見ると今まさにその時代なのです。在来のキー局と呼ばれる放送局の設備投資額は莫大なものです。一方コンテンツ制作を行う事業者の設備投資額は様々で

すが、コンテンツそのものの質は設備投資額によって、その優劣が左右されるものではありません。TVCM にもあります。「スマホからハリウッド」です。「100 万円で TVCM」も広告出稿料が激減する状況からその隙間を狙って企画されたものと思います。

スタジオ夜話は音のお話が主ですが以前放送局の FM 送信機のお話をした際に送信機の音質について触れたことがあります。コミュニティ FM 局の送信機です。アナログですが音響機器会社（アメリカ製）が音響機器会社が販売しているのだから、もしかしたら音質も優れているかもしれない。とコメントしました。

国産の送信機は現在ありません？また非常に高価なものです。デジタル伝送の送信機の音質については残念ながら検証はしていませんが、もはや設備投資額と放送内容の関係は全くの別物と言わざるを得ません。さて読者皆様は如何なお考えでしょうか。

☆そもそも論 III 「売れるコンテンツ」

ラジオドラマは現在非常に少ない数ですが、一部のマニアの方に支えられ放送されています。筆者の言うサウンドなどを含めた VR 的製作手法のコンテンツはありません。コストに見合った収益が期待できないといった背景も影響しています。

TV ドラマの副音声、無いよりはましですがひどいものです。放送局やコンテンツ制作事業者にとってはサービスの領域だからなのでしょう。副音声の内容は「ト書きドラマ？」例えば一人称のモノログで展開されるドラマはありますが、ト書きを言

葉で伝える内容は信じられません。（ト書き：ドラマなどの台本にその時の出演者の心情やアクションなどを説明したメモ）またト書きに限らず、シチュエーション設定まで言葉で説明、視覚障害者の方々に申し訳なく思います。せめて同一内容のしっかりとしたラジオドラマ的なものを副音声で別プログラムとして展開できないものでしょうか。少し古い資料ですが政府の視覚障害者対策（H18 年総務省調べ）として障害者用活字文書読み上げ装置が提供されています。

当時視覚障害者は 300,000 人以上全国におられて、その内たった一桁パーセントの配置状況でした。今はスマホや PC で当たり前の機能のもの、音に係る国の援助事業はその程度ですから、TV 局やコンテンツ制作事業者がそこに手をこまねいている状況も理解できます。

政府がこうしたコンテンツ制作事業に補助金を支給する。あるいはコンテンツを購入することで、少しまともなコンテンツが増えるのではないのでしょうか。昨今ラジオドラマの脚本が書ける作家が少なくなり、同時にラジオドラマ制作者の数も減少しています。ましてやサラウンドを含めたパーティチャルリアリティを理解するエンジニアや演出家のサウンドドラマ制作者は皆無に等しい現状です。先にお話しした副音声での音ドラマ制作など底辺の底上げをして発展させるのが良いと考えます。

国の援助も物質的なものではなく、コンテンツそのものへの援助、また音響機器メーカーのコンテンツ事業へのかかわり方を一考することが期待されます。ここで初めて売れるコンテンツの制作が可能となるのです。



樹齢 400 年とも云われるスダジイがあります。須田さんのおじいさんのことではありません。いわゆる椎の木です。どんぐりのような実がなります。枝ぶりがすごいので、支木が何本もあります。まるで杖をついているようです。常緑樹ですので一年中濃い緑で覆われ、根本にはあまり陽が射しません。気持ちよく晴れた日には、木漏れ日が射します。近くで、小鳥が囀っています。ツッピー、ツッピーと。ヤマガラでしょうか？ (mo)

☆サウンドドラマの可能性を探る I 「制作技法の実際」

2 回にわたりサウンドドラマ発展の可能性は、その背景からも今現在難しい状況とお話しました。事実です。しかし筆者は以前勤務先が教育機関であったことから、そうした社会的背景とは一線を画す環境で様々なサウンドドラマ制作の制作技法を試してきました。今後それら技法がどれだけ役に立つのかわかりませんが、紹介して行きたいと思います。なるべく具体的なお話にしたいと思います。

サウンドドラマ制作 「制作技法の実際」

1) カクテルパーティー効果

読者皆様はカクテルパーティー効果とはどんなものかよくご存じのことと思います。ラジオドラマでよく言われることですが、ラジオドラマは人間の聴覚の性質を巧みに応用した、音創りで制作するもの。と説明しています。先ずはこの点からお話します。

当時の技法としては登場人物（主人公）A がモノローグあるいは相手の出演者と会話するカクテルパーティーの中、対象とな

る別人物たちの会話が、その他のパーティー参加者の会話の中に紛れている時、対象者でないパーティー参加者の、声の音量が小さくなりつつ、目的の対象人物たちの会話の音量が大きくなるなどの演出で、聴覚の特性カクテルパーティー効果の演出をしていました。創意工夫です。しかしヴァーチャルな空間を演出するサウンドドラマでは、もちろんこうした技法でも効果は得られるものの、リアリティには欠けるものがあります。

実際の人数を用意して、すべてのグループに必要な台詞を用意したうえで、収録会場にマイクロフォンなどをセッティング、マルチ収録であと作業にも対応するように準備します、後作業で各グループの音量や移動を試した結果、効果があったのはマイクロフォンの移動による映像というパースペクティブの変化による演出です。

つまり主人公 A から音の場面が離れ対象者に近づく演出です。そのためにはある種の場面転換的な手法が必要で、台本上の大きな修正が必要です。その中でラジオドラマの一つの手法である、ON 移動をセッティングした各マイクロフォンで行わなくてはなりません。

実に手間暇がかかる作業です。演出家とサウンドコーディネータ、作家の理解が重要な鍵となります。もはやカクテルパーティー効果的演出とは程遠い音創りとなります。

ヴァーチャルリアリティ的な演出は必ずしもリアルな音を追求するのではなく、それっぽくって語弊はありますが新たな独特の音創りや演出を手掛ける必要があります。

☆次回は

今回に続き、サウンドドラマの可能性を探る II 「制作技法の実際」を予定しています。

今回説明できなかった ON 移動や、収録の実際を台本のシュチュエーション設定やト書き、とともに図解説明を加えながらお話します。

秋も深まり暖房が恋しくなる季節、皆様のご健康をお祈りいたします。次回もよろしくお祈りいたします。

— 森田 雅行 —